



俳諧
 及聲集
 五

| | | | |
|-------|---------------------|----------|---------------------|
| 無野白鷗莊 | 我曉 及の聲 集 冊 | 第八卷 號 | 俳諧 山田 九洲 部 |
|-------|---------------------|----------|---------------------|

中村俊定文庫
 文庫 18
 289



序

七之條は所まじり一能世は先師の明よまひて十論
 會上より美と粘一それ躬行と云はれ松のこぼりの
 其後ハ麥稗ホ一様をうけし春波と標号ハ改め秋や
 先師の西舞の酒房と慕むる言ふ日より安東坊小
 一の酒泊とて十三年よ及一里春の月を樹下石
 上の竹瓜かき秋の花を綾羅緞縹よゆとひて去留
 を厚重海水よゆとて其味酒乃に廉乃神也



道「あれをたらうればも亦二更のかいありては秋古く
錫をわく歌枕を儿がわもさるるなり 中ノ豊國の
氣通々後乃其聲をわいあつて一冊所ての梨束を
らりては或人側ノ難く白法師の南嶽の産也
南嶽此能修をうなりや予りし僧修者大也
何や南嶽と云偏小といふ也わく風雅は六義の
糸を二つとらうら平らなる也二つと修者かく虚なるなり
二つと修者も穢しき事なりわく中ノ豊國の二つと

修く文^{アヤ}をなると時其梅は聲もわく修者幸治の松乃
隙をありれば模様を變化の智直はまはるる也
和漢の風土もわく蜀江といひ西傳といひ其の物類は
存ありてはアヤもわく本邦の麻衣の都ひきりし國曲の風
雅を比とく又彩乃目をなると鬼神も氣直は
洞なる一見然も下の家直きんもまはるる也
下我風雅をうりてはわく文ハ分野の地理は
案して西ノ道といふぬ火のくぬらなるも男

かの藤と所 五言書多遠く 勢の噂 音の純 云々
彼武まのんも 懸つる 傷を 時正の人 情と
のつこま 人の 世を せんよ 海より 建三の宗
師なるん ぬかくい 江南の 橋を ぬく 扱の 意他
云々 我々 天外の 清響を 惹ひ 梧を 扱く 云々
市に 遊つて 豪画 自給の 精浪人 法所を 荷籠く
かくと 云々

丁お抄夏

八徳翁述



送幾曉師發句 並序

幾年う花小粒 色散 雲を あつとく 念々の
雨は 管に ぬく ぬく 水乃 氷の 網代
かりり 遠西 我柳子 門より 再興 坊一 幾曉
席を 九か 世国 いく いく 海原の 中 小
店を おゆえ なく なく 住給 小 中 及
酒と 樽尔 盈る 新 ぬく 便 ぬく ぬく

里ははあをふとととと誰彼の柝ふるは藤
 き梅窓ふ雪みちるは門人ともあ八百餘掌誠
 にけきかゝ因縁さゝの人の信とあふら
 さうんやふ〜まきと祀神乃きまひ給
 つらふり頻く角文字の古御も恋〜弟
 神をもと帰らんさゝん地と〜く調度れ也
 ころのをも給食る中ふ長明うさふをい
 一孝賀の錦の裏とあわけく美水記

二十をいほはまらひあまや園くの宮中
 小れぬく身に蕭々花〜唯〜勝地佳景
 いさうら〜あ都鄙遠近は贈言金と
 鳴〜玉を振ふ他清新古の巻能けら
 魚〜らんはむ〜あ二見乃苗ふ二まひ
 らん事もあ〜り地を也免路ま九〜も
 に名をを走〜沸ふ十二とさ〜い及のあ〜
 久我二ま〜ちあ〜は〜ふけ地記

心形くく承く須面く其寧に波傳今まあ
かりかく心る内ふ船既乃聲くまめそ
順風か船く我をいする船やまのくま
あへ為餞別地也亦告くて風月の
離情と我おしむ暁とまきりり勢

ま〜船若れり我

照く帆掛船

春州堂

嵐通稿

伴勢



名宗くく也 柞あまの秋の月 守武
梅さくくハ南乃枝や水舟後 臣一
わりの風月我勢くわりの鶴哉 弘氏
啼ふ少くくくくくくくくくくく 松木氏女
梅よさくくくくくくくくくくく 聖女
稻葉よ寐姿をける板守り那 宗乙
辛涼のくくくくくくくくくくく 凉允
さく波の雲張くけく板屋く那 芦本

町んこをりし地を淋しい飛くめ 乙虫

都のさく木はいううーさ二月夜 志考

やつやうとうの星や友の心 采友

秋あうさ空を我程の鼓う那 信昌

一はまのこ葉を我喜う那の落は那 友古

荊^{サルトリ}蕨のむさく居はううこ那 駿古

けくく瀏よひらうや夕涼 吹菰

子し女うわらむわさや之筆 勝政

紫陽もやんやううわおまき 憐竹

咲くは花も一枝やほの月 春鹿

ほやうう活獵公うは物う時 茂秋

ふ葉もや描はゆ種のは伝窓 南畝

名月や我うのや平よまう人 梅海

基よらうや扇橋うじり 弥丈

又月やせん鶴のうううり 東棠

雲のむさくもちううう 偏古

草物や活屋へうう 冥石

お語のむさくもあうう 五道

温泉の山よ肥る女わりの夏木と 如勇

荷わるる子母のあまく氷うね 船古

け新銭^{カワ}筋^{カワ}もるや程うく 妻丈

八子よ膝を喰く柳一柳 陸之

鴨さく一舟のうり命うた風 吟家

あれ中ふ氷室もあうや雲のなぬ 壺丘

松尾のとりり乃わう麻乃あま 曾北

右所之章ハ古酒也まこ幾曉所

く旧藏の亡人親睦也

時ぬくあとうく元は夕白うね 蒼峯

草貝りや砂は宿ましくきのあこ 芳徳

癒く本心らのちくくや序む 乙名

お嵐は沖浪そくゆくちもろか 亮士

東の葉とどぬもあけり花月 杜夏

いらくの花はつるお花柳うね 今

梅くや梅は懐年のほもやう 如く

ふ年花の深のくくくや別おぬ 飛忠

ちくぬくくくくくくくくくく 南利

法のうらやまのめしよはれらうか 披也
 旅人も苦くは遠くやうつもの心 妻奴
 うらやまの神もけりなまのまの心 温座
 名もやあまも入らるるおの心 素座
 心成越す所のよおのや藤の声 八至
 つらうらやまのこけやあまのこ 旧也
 空振青くは古実なるん朝あやめ 免柳
 田舎の落つらあまや飛の心 百童
 爺親乃の心は田舎や雛空り 房呂

細人のゆめと何る 鶴う那 日暮
 いかめしき瀬よなす 葎う那 懸水
 那うらけ 葎のあまのうらうら 松比
 言のあうら人やあまの神うら 何声
 園いあのとらうらうらやあまの心 鳩市
 夕顔もねあたらしくは星まうら 素座
 雪の乳母もあまうらうらあまの梅 榮河
 娘うらまは白髪持らうらあまの心 旅充
 袂うら珠珠と禱やあまの心 畔古

ゆふ夜も朝鳥もあつ星月ほつ 李江

うさうさの葉もあつれ星の恋 庄来

早蕨乃手紙かとも葉に被く 紀之

沖中よ一陂蓮一雲乃らぬ 東皇

こり舟の帆もたつふ汐了り 左雀

岸や雪の厚くもあつ月 祖翁

枝少けくもあつなう柳の影 巳蝶

うさうさの葉もあつて雪舟 昌浦

ゆふ夜の雪もあつて海に舟の影 甫遍

牛の背に首もあつて海に舟の影 以二

花よ静かぬもあつて柳の影 三戸

まうやうの厚もあつて月 扇呂

夕影の厚もあつて月 素美

こしけらるるの影もあつて月 反社

朝くいる中もあつて月 弁法

久々の身代もあつて月 扇峯

冷きやもあつて月 加濃

混沌もあつて月 杜谷

ふきりいさしきやしめささうね 五 里史

むの音いさしきやしめささうね 彭里

よりよよ作何う麻のきり 木坂 麦推

いのとくさ杉のきり 津 里同

神うんぬのきり 悦岸

舞子のうさゆり 鳥説

人言のこまあお 麦裏

きり 四日市 燕説

水 玉之

八朝や福も禱よ風乃る 俚言

めりも桶やうり 業名 牛遊

うさや 八個

秋の白れ 杉夫

古井戸 麦士

子孫乃 枝山

あう 棠故

神凡 未了

流の 地方

夏上

修くはくろく虎野く落くる 八九

錦くはく落くる 宝火焼 宇均

中皇成りくはく落くる 宇津城 曇舟

吉野おひさけくはく落くる 葛の糸 佳玉

早原くはく落くる 松の糸 春渚

宇依の幡を結く

葦原や神のさる 池を舟 春波

一息をうたはせ けりくはく落くる

せうくはく落くる けりくはく落くる

けりくはく落くる けりくはく落くる

けりくはく落くる けりくはく落くる

けりくはく落くる けりくはく落くる

けりくはく落くる けりくはく落くる

けりくはく落くる けりくはく落くる

けりくはく落くる けりくはく落くる

けりくはく落くる けりくはく落くる

ちかハこりりしつ 張り付のきん
 へ何れにやこしやあさ御一々
 か法の人を一卯月十のあし
 尚ほハ世あふ千川大とわう筑前
 飯塚兼ふ子西持をうかりおま
 人うこもあふすすむの春のむ
 ありん一とらん世とわうせき

飯前

落葉よ谷の流じりおさる
 鶯のよけしうもさあなぬ南 汝白
 風流も志つめくおの柳うち 吳舟
 鶯や机ゆふらん一庵 岷亭
 初秋や葉をほく一毎青鶯 里可
 竹枝割れ^{ナタ}ふ方お起鶯秋の風 凡平
 名の月や雲よ物よさうら 雲翠
 名仙やまうらの影残石よ咲 百水

愚山

非吹

汝白

吳舟

岷亭

里可

凡平

雲翠

百水

好衣く石段持つる柳の如
 煤をこく帯を春の下昼の如
 冬枯や唐戸をくく一帯の堂
 春雨や海氣くく啼か山は色
 治戸あくくいねきくおをてす月
 梅貞

海中

今令のちくくくとく線く那
 帳柱乃海麻を涼く松の陰
 浦より海一山を張我物よ
 阿生

芦守 之達

倉安 此揚

兼此新女音や 世の重云
 百滋
 切店や徳治の雲ハ波は結よ
 其遠

石山の世見よ

世よ借らんは京式アの草くく
 玉嶋 万支
 杜舟こくくまや 京本心抄治
 又良
 後の月や若山吹さくくく
 鴨方 可環

飯後

雪の音やゆい込一巻糍
 福山 素浅
 稻葉や酒よくくあ川床几
 沙鷗

旅中一吟

朝

あよこれと聲も柳もさうりうね 荷國

馬うらよ女あうしや也本榎 三原 倚杏

娘のゐる寺の地気や初さうら 夕舟

舟れ也よあはまこく入る名園の月 大母

梅の葉も深うらうらう鶉乃夢 鹿友

眼はややく鶉のまゝのや秋のれ 尾花の 一芳

安藝云

茶菊の存あよらうら多楓 巖崎 礎月

おまや茄子を店よ畑の夏 麻直

嵐さくぬ定れあうねや冬牡丹 故洞

駒下結や園よ落つく丁の声 二助

おききんや一日作る下女う晴 汎砂

前若くはよもてる寸葉んうね 心全

星わらる解帳の地ようさや竹の真 似夕

鶯や銀作乃癒しりのよむい 大勝 路芦

周防

薄のむ乃やうらや海土のうらう様 出石 知云

入ぬ哉あふくさるる椿の柳 昇式

昔の世の波よまらるや弾の声 里畦

昔の世よあつてあまの心 伯凡

豊後

日田

昔の世の波よまらるや弾の声 里畦

昔の世よあつてあまの心 伯凡

昔の世の波よまらるや弾の声 里畦

昔の世よあつてあまの心 伯凡

昔の世の波よまらるや弾の声 里畦

昔の世よあつてあまの心 伯凡

昔の世の波よまらるや弾の声 里畦

昔の世よあつてあまの心 伯凡

昔の世の波よまらるや弾の声 里畦

昔の世よあつてあまの心 伯凡

昔の世の波よまらるや弾の声 里畦

昔の世よあつてあまの心 伯凡

昔の世の波よまらるや弾の声 里畦

昔の世よあつてあまの心 伯凡

昔の世の波よまらるや弾の声 里畦

昔の世よあつてあまの心 伯凡

敬遠のまゝさゝ敷やけしきん 汁梁

鳥のささり目さふ唐一や稲莖 母お

稲葉や波の言をたききさ望 孤^{さ田}糸

さ竹ややししく振く下わし 全

雨雲のちくさ新く岩よはし 廣

青柳よ清し朝日の一とく 今路

末とわさる青きうへく朝神糸 之飛

幾つたさるくもふさ様り朝 里雲

空曲空よまきねおとくや小お徳 友友

夕陽さや半漸も一漸けきさあ 赤樹

郭公啼やんる半んるぬ牛 佳洛

夕飯よゆきぬ猫の悪路の如 六清

結衣あささ草の海さや庭さく 梅路

那の底成さくす嵐や啼くはら 里友

波おきるお又い遠し鴨のさ 春圃

山吹や波よ三株く居る朝の身 心長

空舞の風の裾成さくく柳の如 里帯

若草切れさわいものぬるまゝ 和泉

月鏡りのまやや雪も折る社若僧秋老

鶉のや果重らぬ酔のゆゆ 渭翠

折るまゝをんらんや甘夏も立 罌

落さぬも月解る氷室山 墨

音け我今波守空や啼も鶉 白丈芝傍

雪解や猿のけつゝもれ岩 南爪

穂落る帷ヲナもあゝ糸柳 知我

風よ酔よみろ流るるの梅 支月

鴨まゝゝゝゝ藤もろる乳母の冠 和名

夕立ちや狼の宵よ残る泡 野虎

骨折く流や落る人夜も立 花牛真玉僧

折納まゝ本魚よ成る曇る那 巡古

世の中れ鼓いせゝゝ切ゝ子 灰扇未根

雨のまゝ人の音もあまひ子うね 灰竹

大らあのかゝゝあゝりや折ゝゝあ 虎角汲水

定るよ流るゝ入りのあゝる名も声 野泉沓掛

眺ん流るゝあゝ流るゝあゝ柳る 露滴

分別流るゝあゝ流るゝあゝあゝれ 蘭阜八坂

夜上

廿四

修竹名ハ石原小軒や小松の鶴

杵築
莖笠

萩さくらや花白くもさくは似鶴カシ水

全

波場よ枝まうこり小柳うね

竹茂

繡の箱さきまうこり一秋の風

子唱

深山ちやや芥磨くまの秋まきさ

反之

初陣やぬき色のころも雲の肌

夢里

卯の虫や音中下風の鳴る海を

小浦
若水

友のりよ下白を垢乃きさくね

昌菴

虫干や子鶴まき色一あり

符内
溜柳

雲月の古ふゆげこや友のむ

山嵐

竹のまうこり起ぬ草や雷乃羽

石芝

竹深く水鶴啼や病の糸

調去

名月や鏡の肉裡の團子まきも

友仙

友拾小おや音よさうく満子を

春水

槽うこや同くくお花もねぬの山

義滴

小田所のみまよあゆまう夕白うね

銀海

梅りこころあくもまう小春心まき

甲雲

花吹や柳まき音成まうこりあ

可ふ

友上

五

一わ〜一 遊戯ひらめく邸の音 鳴凡

ちろむよ ちろむよ ちろむよ 蛙考

葦や 吹ん 響よ ちろむよのう〜 梅必

ふより〜 法師の 下結や 冬の月 楠 貞

雪や ま〜 朝あきぬ 鈴籠 平 田志布 相序

筑前

この戸や ちろむよ ちろむよ ちろむよ 果十 林田

ま〜 ちろむよ ちろむよ ちろむよ 凡苦

酒店よ 勢揃 ちろむよ ちろむよ 魯白

音成 振く 風と ちろむよ ちろむよ 子園

ちろむよ ちろむよ ちろむよ ちろむよ 一丸 菱野

鈴音よ 追つ〜 鈴や 冬のう〜 亡人 梵凡

鐘の 母成 ちろむよ ちろむよ ちろむよ 其甫 古毛

葦葉や 竹 紙吹 ちろむよ 机前 長閑 掃法

井 落る 音や 小 壺の ひら ちろむよ 石成 掃法

光 明の 福 葉 ちろむよ ちろむよ 全 全

朝乃 葉よ 音成 ちろむよ ちろむよ 全 全

浅 瀬の 鴨一と ねや 月 ね〜 不 法凡

初ノヤアケレト白ム屏風山 梨

萩尾ム船波のうらうや舟の声 沙益

耕の馬志つくりりくれ柳 下物金 枝滴

琴の酒のまじけ抄やみん珠 其木 柳子

蜘蛛よ痛むまや抄らん橋の人 秋月 汁律

ふれぬのひらつる屋やまきつひ 勸雀

河のうらむとまよとらまさうね 丁加

虫や揚人し種ささうやね 五溪

さうらねや流よさ返さるはね 内野 苔石

あふ紙張松や舟のゆふさる花 若和

舟にたふる鳥鶴乃これ尾や春の雨 助嶺

むらむや時くれはけりくしき 昔は昔 葉葉

つさきし揚や揚らんむりし魚 走山

ゆふ影やたさくまを酒ころろ 飯塚 春芝

をみゆらう未ぬいさの橋舟うね 素立

昔の道のりし路やゆまきみ 松亭

河にゆく芦屋の朝や晒白 水巴

雲我れささるはるまじや時あふ山 之木

及第上

廿六

枕ふくぬいぬ清く梅の風 梨角
 抄紙の音ふききらるる梅の音 梅筋
 ぬりぬりぬききらるる梅の音 柔山
 子細くもやらぬあふきのぬききらるる 飛田
 はふききらるるあふきのぬききらるる 重光
 梅の音の淡くもやらぬあふきのぬききらるる 中牛
 漱くもやらるるあふきのぬききらるる 信芳
 うらむもやらるるあふきのぬききらるる 文季
 中牛もやらるるあふきのぬききらるる 山塊

ほくろ眼は抱く梅の音 直方 文雄
 七夕や梅を抄紙の耐り 鎌 兼雪
 中牛もやらるるあふきのぬききらるる
 朝風や梅の社乃新地と 為曉
 月のおれも梅の音 菅屋 素之
 書信一波も梅の音 宇麦
 石曲突ハ行きのあふきのぬききらるる 素蝶
 ふききらるるあふきのぬききらるる 竹圃
 川との梅もやらるるあふきのぬききらるる 今乙

時雨の中 雲巾 霞あつたふれ家 不及
 時雨 一夢ぬくや 糸と 際 来之
 吹くくぬ柳 いろの柳 柳 柳字
 一袋おと 夕や 柳 柳 柳
 牛ふくく 柳 柳 柳 柳 柳
 柳 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 清く 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 糸ふ 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 蓮生に 柳 柳 柳 柳 柳 柳

雪垣ハ 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 切色 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 葉のむ 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 小刀く 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 車雲 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 初冬 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 中 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 赤い 柳 柳 柳 柳 柳 柳
 掃控の 柳 柳 柳 柳 柳 柳

夏五

廿九

生紫もむのしりや神ノ穀 悟中
 河川も草に風のまろみも梅のむ 風文
 松の影此平を枝をうらやも鷹 石櫃 素呂
 風俗のまもよそら柳う那 可成
 冬清し一五葉枝より新智山 素呂
 掃るよりあやうあのはく梅のむ 羽田
 櫻の影少に海見ぬ人もうあ月 呂道
 ゆるうの清し一庵ハキうさ証 之東

筑後

青葉や海月あつししし春葉ぬ 久米 雲虎
 鶯や葉乃葉のうけ梅ぬり軒 秋虎
 本城了すふのむや神ハ神 葉夕
 炉軍や梅極まうし一何葉ま 柿岡
 証河せう葉葉ふ月ハ葉あし 眞也
 砂一をわうく小春や新あし 採下
 芥子の香ふくく冬清のまのこれ 鳥冠
 五りのあや葉あえんまあまの敵 子孫
 竹海しあういあうのむはあま 五鼠

のの根乃ちらや葉の枯らら
 花例
 亦これも種のを清めて解
 秋露
 空ののり糸もをしも芙蓉
 魯用
 多竹や葉は深き一もあり
 尤寂
 風涼し市のほ乃はさへ
 可淳
 昔のささげ合息のと風の存
 善導寺
 名乃のうらうらつと葉の肌
 古力
 お色に厚の乾や綴り舟
 伴羽
 たり杞てを刷らん
 拓足
 市心
 萍は陸をゆるや澤の雨
 秋茂

肥前

あり底よ早ふうと居る雲の形
 一路
 大村僧
 葉よ強きついでや明乃種
 全
 鈴生よ葉は入るぬる居る形
 灌花
 蓬生よ葉は動く杜丹の如
 投厄
 虫とせは管とそく銀の声
 全
 昔あり小月夜漏るや極乃は
 青流
 静るる世はあつて生ゆ嵐る
 二水

す〜きも海り帆形や海の面 松崎 友玄
 柳の美や庖丁せ〜くきり 龍角
 細の竜の色淋〜れ批把花 長崎 治左
 よ〜きゆい浮世水海や神をき 斜竜
 猛^{モリ}虎の枝〜くぬ朝や毛標 砂麻
 夕影よ夕々を〜け〜く夏腐る 加十
 月の輝よ袖乃ふ〜く踏る那 其帛
 冷香や打〜け〜其の〜く終る 天舛 壺園
 け〜虫を掉の〜くさや袖中風 縁豆
 帆の〜れ流も〜く〜り鳥の音 柳巳

二重浅ゆ〜り合字や葎の風 壺中

二陸麻子

お梅や乞貝よわりの糸と糸に 麻兒嶋 文里
 深草の苔或は新新新 全
 くらぬぬ君或は碎〜く教る那 文松
 陸希那も大籠の〜れ小盆 文梅
 おり砂麻向る好音を〜く書高 一流
 雲虫の声小陰子〜一庭の月 清井
 輝や長〜く交脱く松ハ者 清玉

りし舟もくく高き月しれぬ船のむ

日町連中
翠柏

芦の舟よえん志半ありほの月

全

常や都に魚り小高人

芥志

うーろよい雪よ弾きく涼く都

高麻

猿知されくくは強や初梅

子雪

酒利来く痛の若きわねはう

桐里

物くくの声よまきくやうのくれ

味長

浮徒く若のさく海やみのた鳥

浦子

海くむくも青くくまれと鳥

点雀

中云くくぬ小春もわら梅くね

儿山

十軒くや舟ははまうか栞

栞步

ふ吹や市くくりくく梅くく

芦越

徳白の法もくくしや杜若

雨夕

一口ハ茂くく吹く法もくね

梅丈

都塞や法よ枕れあうく

季元

餅也や鳥やくくし神の奥女中

琴鏡

赤山むやおのるよ藤くく山形

碎蝶

さる色を色さぬ乃や茶うく木

是重

歌集

廿四

いんげん

廿四

やうくさお雲に濁る西戸

さるくさくさ種をまねくも鷹

田代揺るひさよ声あつちのりツラ 一張

月あつち一舟雲のくさる雲 淀蒸

物形や餌よるる籠を糸く括ら 巨川

日向

垣の酒あつちよかろくさるる水 西戸

さるさるく釣酔をさるる小舟物 東戸

とまろくさく地打るるん即くさ水 西粒

河形よあつちのりや源石 川久

麦蒨やりおとさるおし種宜 秀浦

大さの船より橋や浦のへ 水柳

并いを法も法一り物のみ 幾原

さる流さくさくさるるく鴨乃多 兼治

宝倉のく流るるくさる田代 白水

らへよるさるるさるや川打戸 丈立

何系くさる又并麻あつちくさるさくさ 可考

晴んくさるさるさるさる乃多 官修 芦江

いんげん

廿五

けききも月のふやに中酒 集古

あしつゆあけの暮や夕暮 高巻 去知

ききあやむらり措く片鹿 の葉

ききあやむらり措く片鹿 里凡

風流のなす片ふく世とくさきとわんた

息をくさきとわんた 一橋貞治の抄

なす片ふく世とくさきとわんた

風流のうらふものよけり 余長

の葉子橋 余長

綴り 余長

又と身富貴 余長

ゆ 余長

二 余長

す眉つるものしほのまゆにけしき
 ましきさし又とりかたり縁者みか
 りに子まぢあらししる終くは
 めく奥あらしり倫よあひのふら
 おむしこれも料理と酒に飽
 遠ふしく貧うらものをたあけ
 肥しじうらそ又及の建との二
 らうくさう又あなつとわ佳
 あらうらに他のまねをさす
 くれ

とう夢のなみし入るこ
 たらふふ定家のまをさ
 ことまじくは楽さう揚
 子う方寸小入やうあつ
 かせくこ十の指あさす
 中々の指うらし
 け法むさるおは又器

右掌澄雅文うあ
 く奥まあらしの體
 右掌澄雅文うあ
 く奥まあらしの體

あしおきぬのゆくしゆくしゆくし
中の中ゆくゆくはなはなはなはな
おせんりゆくしゆくしゆくしゆくし

あしおきぬのゆくしゆくしゆくし
はなはなはなはなはなはなはなはな

あしおきぬのゆくしゆくしゆくし
はなはなはなはなはなはなはなはな
あしおきぬのゆくしゆくしゆくし

深田路ノ歌

七龍前若治子玉也

肥後

熊本僧

あしおきぬのゆくしゆくしゆくし
あしおきぬのゆくしゆくしゆくし

あしおきぬのゆくしゆくしゆくし
あしおきぬのゆくしゆくしゆくし

あしおきぬのゆくしゆくしゆくし
あしおきぬのゆくしゆくしゆくし

あしおきぬのゆくしゆくしゆくし
あしおきぬのゆくしゆくしゆくし

あしおきぬのゆくしゆくしゆくし
あしおきぬのゆくしゆくしゆくし

あしおきぬのゆくしゆくしゆくし
あしおきぬのゆくしゆくしゆくし

あしおきぬのゆくしゆくしゆくし
あしおきぬのゆくしゆくしゆくし

あしおきぬのゆくしゆくしゆくし
あしおきぬのゆくしゆくしゆくし

けり板よ海^{カイキ}音落^{カキ}や夏^{ナツ}は月^{ツキ} 櫻^{オウ}文^ブ
 小車^{コクルマ}もま^ま早^{はや}の飾^{カズ}や夕^{ユフ}河^{カハ}原^{ハラ} 三^ミ枝^エ
 能^ノ果^ノぬ^ぬ床^{トコ}よ鈍^{ノボ}の^のや^やふ^ふ他^タも 百^{ヒャク}尺^{シツ}
 鐘^ネ撞^{ツキ}の^の按^ア鞆^ツ成^{ナリ}冷^{ヒヤ}寸^ス雲^{クモ}邪^ヤ 音^ネ泉^{ズミ}
 漱^スハ^ハわ^わゆ^ゆく^くか^かる^る流^{リウ}成^{ナリ}か^かく^くこ^この^の 砂^サ心^{シン}
 梅^{ウメ}吹^{フキ}や^やく^くま^まう^うゆ^ゆき^きの^のわ^わや^や松^{マツ}垣^ケ 音^ネ凡^{ボウ}
 万^{マン}葉^{エフ}の^の神^{カミ}く^くこ^こう^う柳^{ヤナギ}う^う水^{ミヅ} 五^イ郭^{カク}

表中央

身^ミむ^むら^らの^の秋^{アキ}風^{カゼ}き^きく^く柳^{ヤナギ}の^の杖^{ツヱ} 三^ミ枝^エ

舟^{フネ}よ^よあ^ある^るあ^ある^るの^の津^ツや^や舟^{フネ}は^は松^{マツ}
 御^ミり^り流^{リウ}る^る舟^{フネ}く^くこ^この^の津^ツく^くこ^この^の津^ツ
 舟^{フネ}ハ^ハみ^みを^をじ^じう^うく^く舟^{フネ}や^や舟^{フネ}ハ^ハつ^つ 其^{ソノ}夕^{ユフ}
 冷^{ヒヤ}妻^{ツメ}よ^よ流^{リウ}る^るや^や舟^{フネ}の^の川^{カハ}乃^ノ末^{ハタテ} 梅^{ウメ}凌^{リョウ}
 桃^{ウメ}吹^{フキ}や^や斜^{カサ}よ^よあ^ある^る舟^{フネ}の^の子^コ 其^{ソノ}音^ネ
 舟^{フネ}ハ^ハよ^よこ^こる^る舟^{フネ}吹^{フキ}や^や舟^{フネ}乃^ノ麻^マ 可^コ興^{キョウ}
 石^{イシ}曲^{マカド}窓^{マド}よ^よ幕^{カクリ}の^の舟^{フネ}や^や舟^{フネ}ハ^ハも^も 梨^リ吹^{フキ}
 舟^{フネ}吹^{フキ}く^く風^{カゼ}ハ^ハ吹^{フキ}り^り舟^{フネ}ハ^ハ秋^{アキ} 其^{ソノ}音^ネ
 舟^{フネ}ハ^ハ乾^{カハ}く^く舟^{フネ}ハ^ハ秋^{アキ}や^や舟^{フネ}乃^ノ末^{ハタテ} 佳^{ツキ}石^{イシ}

草場やふ入るす海乃際 毎冷
 月よりふりき懸るや百合の心 試来
 傘よまわぬらんをうり花標 廣石
 みくくやうく鈴鴨も神の曲 徳谷
 三竹や軒より朝ふ橋の糸 梅里
 埴網をよほよとせよ小巖の那 杏伝
 赤く織よころもわらぬ礎の石 山方
 豊成をよほよ梅のくはやちさる 東柯
 初戸やよほ此新よハ瀬の声 全

小籠や椀乃雲霞中よむらり 梅甫
 曲福よ鈍子のけくや雲の音 梅泉
 雲よくくまの鴨やゆふむく 梅里
 雲よ麻れゆらりこすや里の心 全
 是一の隈あり月乃こく一航 徹見
 み糸入れ雲はうとらひらり全 全
 ありぬやそくも見らり流の結 路香
 月よ雲じよらやゆらりや河鳥 全
 河草やわらりよとら茶子坊全 全

於中のうれはすややれはる
 忘れぬ梅や下る枝のうら
 二百年せよとけりや袖くれ
 山吹や石段柳乃結のりは
 翠の言れはひらきとや里の飛
 仙人の下戸あし柳のむし
 新巻とよとていさか燕うら
 思ふあややあひさしとて流る梅
 雪のうらむとけりしと柳の雪
 基有

此は屋やまもさうとて
 うらや牛の顔はさうとて
 十とあや志りうらうら
 新起の南の橋はや雪のむし
 柳風は松子あひさしとて
 海人^トはさしとてあやや
 ありくととてさしとて
 九とてさしとてさしとて
 雪のうらむとけりしと
 雪

雲庄

傍於山

町連中僧
渡心

全

古歌

仙李

柳風

之云

雪

室はあぐらにいとまをうた梅のむ 病六
 海菜も草を膳へす秋の面 泉七
 あゝ海の家あけこり月 五及
 涼へこや扱^かひこく月ゆり 巴来
 朝市や遠くより柳の声 紫来
 夕草よこしりくさるや雲の瓦 林木
 七賢の靴ぬ目ぬり竹乃あ 友来
 ふ中れこすは家清は月の 笠海
 一上風木のまやあきて野の夜 梅江

鈴虫やとくしはよろく草枕 一泉
 赤ら糸も深めてハあー一時毎 一出
 扇伽のまろくやまろく時鐘の形 可本
 建并ふまゆこ節へ花の名 可山
 あゆみ休む竹の中ら梅のむ 嘉風
 鏡をくく形のく春涼の形 可到
 城とりくあこしらひく夕涼 嵐瑞
 二月月おのりやこく暮あを 杜若
 五月月の影中へこく梅糸の形 春枝

唐と約しは清しはうきまはにほる雲

まうしや庫車は若き白くハ齋の言 我来

世世の月しはうきまはにほる雲 曲柳

棒のまふふ別しはうきまはにほる雲 好柳

世世の月しはうきまはにほる雲 志流

まはの月しはうきまはにほる雲 平山 市夕

尺八はうきまはにほる雲 百芝

物るは清きもの尺八はうきまはにほる雲 泉川

うきまはにほる雲 吸江

夕り乾草は若きものありさうね 全

お代や若きものありさうね 梅の乾 梅々

酒のまぬ形は若きものありさうね 若湖

雪やまはうきまはにほる雲 李有

胡風は若きものありさうね 如蠅

船は若きものありさうね 李全

まはの月しはうきまはにほる雲 百和

まはの月しはうきまはにほる雲 鳥平

まはの月しはうきまはにほる雲 永春

焼くうも色ふあふりり花のふ 露朝

露の背あつや汐毛の芦の角 砂美

朝霧の鐘よあまうや虫乃夜 柳也

赤紙よいそくあや沖輪 嵐斗

糸の虫や朝紙うけり山の糸 笛秋

あまよはる盤くうや雲け風 春松

竹さきー花もばりのあまのうら 梅舟

雲子やまうらうよまきー福笑う花 あ也

春の命や舟うらあうら古陶 梅里

常の舟や花かひと魚うら鶴う花 如柳

田舎ももあふふあねうまの舟 舟舟

虫寝うらやじうーの音れ帆 夢の

琴の糸も梅の糸よあかりりり 柳伝

鐘はあやう坊主紙吹く聲の声 加旭

春の糸乃舟門うゆり社う花 湖風

星のあや竹うりーら松の琴 乙甫

短冊れ七色や花よ早の伝を 乙甫

あまの伝わくあまの舟 船のれ 乙甫

摘草あらしの端のこころゆきうね 左五

あはかくたよあつらふこ四蝶うさ 右五

まほやそらからゆるむ江のえん 李北

みゆよけしらぬ影や粉粒^{入カ} 鶴和

まほや門ふ一畝の起りこり 僧 而也

日影むくきそ影のるや片時 葛和

あまや青侍のまの底 李後

こころくまをぬまや葉の側 又表

まらしくよむり名や葉乃む 僧上人 六五

まほやあらし冠おし 金湖

うきよもぬ葉空の意やあのみ 之相

耳の穴うくくは海して涼うね 玄五

枝れ影もよむくやあのみ 南園 梅壑

樹のうきを解くよらうく 未表

くさくさ白濁みよし所はくさくさ
と感吟 跡をよ入集をよくあら
何れも常の白半付し
常や候よ書きする椽の先
今も草叶くさくさ人子紙
留ししと

其の

大正

正秀雅士

大正後福山素淡子不抄也

くさくさ白濁みよし所はくさくさ
と感吟 跡をよ入集をよくあら
何れも常の白半付し
常や候よ書きする椽の先
今も草叶くさくさ人子紙
留ししと

此は文花の巻物也

梅里佛曰くさくさくさくさくさくさ

うらさあさうらやさあさうら
禱の言はばくすまはくす
色—— 貞亨式細注よあり

麦林帯田おのう得るうら二つ解乃至
十解中五解をくく蕙風のねらや
肩いづかしくおのう得るう解を
くく心風のあさすとどりのねら
小黒の乾畑と入んとかりあく
翁の辨察は油くうらうら

詩經の家北何種何種とくさ色を
まのうらあく得るう種察を欲
中して時々習つてを能く
うらう得るうも坊うらも擬
あ——やんあうら
法極我採つて色—— 麦林帯田緑よあり
或難曰麦林く風の錦繡の
我家の風の木綿の——やうら
免路陳曰くねらも例の偏室

曲首地之三神は自由の心とて二
之神は凝り固りりくもやいふやうの
錦繡と云

星は朝の初地は啼や漢字も 麦林
まゝころの本錦と云

昔形の隣りもあうくあうく 全
こけこれ自をこころの人いふもや
知甚白守甚思為天下式と云 石酒
の用をさうりたり

仔細

え路の宵身冷し一軒は鷹 字格 恩竹

切秋のほやらううううぬら 義六

ハくねや古々の命多知の人 天曲

涼しさい彩は竹のまらう知 何む

北をさうさうぬぬぬぬぬぬ 仙舟

濱門や舟の庵ううゆの鶴 益雄

塔ん山海指もさき一さきの秋 湖竹

鶴よはのりう鶴よは母や里の雪 枕流

の涼一 暮夜よけゆく 四念の裏 扇掛

飛のまゝ 木枕しるや 小あまのこ 文政

障子よ 神さる 新ら 落葉あうね 蘭溪

神まはら 菊まき ころろ 落さう子 栗山 庶有

雲より 此 紫衣 音く ころ 踏くね 志山

ころろろ 也 掌より 砂へ 尸の 猶 通外

種く けく せきく 朝の 灯籠うね 十八九

暮の 戸也 あり 志めて 落る 解 淡文

初や 今 の 心 此 志 ころろ 二律 九十

手に けを 結よ ころろ ころろ 志計

涼く けきく ころろ 涼く 那 再可

初時 雨 共 ころろ 也 しの 好あ 信下 既方

秋風 暮る 柳の 葉よ けり ころろ 也 控 會芽

玉し ねい 身の 印よ 鳴 割く ね 兼同 百六

新表 此 神や ねん ころろ ころろ 捨十

燈籠 ころろ ころろ ころろ ころろ 佐方 文甫

流る 流る ころろ ころろ ころろ 大井 小山

の 庭へ 中 ころろ ころろ 乃 風 小季

後集上

廿九

心まこと 庵よ 夢あり 都印本 春芦

秋風や 呵のうら ー ー ー 茶味

いー人の南 詠乃 海雲 今川 波止後 一石

琴の音ふ 落ひぬ 中 雲の舟 柳舟

鳥の影よ ちいさ 別さう 川柳 一志

大石 春よ 足 踏く 玉 玉あしき 一友

梅く ー ー 心 心く 舟人 長安 院 孩風

舟よ 従く 葉や 姫 葉の けい 花 春情

風けり 指り 凡あり 涼く 庵 万葉

舟の 家 乃 ー ー ぬ ー ー ー ー 洗滌

空より ち ー ー ー ー ー ー ー 南陽

晴く ー ー ー ー ー ー ー ー 久吉

市 海 乃 樽 也 乃 舟 此 あり ー ー 一 畠之

暮 ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 総沖

名 ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 武雄

生 ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 春友

中 ー ー ー ー ー ー ー ー ー 一 疆平

心 海 乃 あり ー ー ー ー ー 一 死云

この家さうらのやうに今も神楽
お乃梅や枝と活やう一ツ家 可碩

神家よりおーお神の
傍より對し

併えん松う糸のほろ月 大戸 里

あちやの

翠の青もあやあうく十之松 氷見 柏我

身影我孫よまへう涼那 上野山 玄く

儀の香のせうのやまゆよ乃風 多摩 必物

吹久くあやあさあす薄う如 土居 呂天

結々や人もう人此神珠 感花

虹はよ粥我うやうあまう如 嵐物

うう門を我経里や虫の声 巻風

田糸れわいの物もや虫乃あま 河宿

るあうらよぬらうやうらうり 忍口

初君よ落くうらひや二日月 嵐木

松のうへに花ううやあうか花子 漁津

朝一さうたあうまれあうあ 閑卜

一かあまうけうりあまあを 漢路

ちうへいさけおとせよはなはな人 賢あ

日の輝よとらきく起るおとせうね き川 由良雄

ふまれねよおとせのうらひうね 其甚

ま九日けおとせのり輝の集ゆん

よお人の業乃るおとせの法とあけり

いとおとせのりおとせの法とあけり

やこはらおとせの法とあけり

おとせのりおとせの法とあけり

親まおとせのりおとせの法とあけり

おとせのりおとせの法とあけり

おとせのりおとせの法とあけり

おとせのりおとせの法とあけり

とあつをわづらんこしはるおのれ
合意ゆつとこしこしこし
お側よりこしおこしこし
古今集こしこし

あつをわづらんこしこし
お側よりこしおこしこし

こしこしこしこし
お側よりこしおこしこし
古今集こしこし

照ふりくあつこしこし
灯きこしこしこし
おのれよりこしこし
お側よりこしおこしこし
古今集こしこし

芦葉

中々庄

お側

三竹

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

お側

川口
お側

お側

お側

あまの掉とりあけの風は 漢夫

しほの浪のほや 枕枝

河中の柳あけけや 有利

よのけのけしき

神代や 南浦

春のあけけしき 領家

よのけのけしき 角文

山人の背中 青須

鶯や 法下

讀改

杉ふり 後回原

あや 名房

海堂 中田井

あけ 二月

あけ 月止

あけ 観音寺

あけ 柳子

あけ 文川

あけ み耕

月心一室小葱子方の香とら〜す 奇香

日影一庭室小捨つ〜の梅 丁南

春草のさ〜り〜ら〜やぬ〜ら 歩月

宮子方の射〜り〜やぬ〜ら 竹明

山子方の梅あり〜らぬ〜ら 枝子

患止一猶れ名やぬ〜らぬ〜ら 舟我

涼風やぬ〜らぬ〜らぬ〜ら 大河

空子方の雲の化れぬ〜らぬ〜ら 抄花

山子方の影の化れぬ〜らぬ〜ら 仁尾 昌風

春柳や交くぬ〜らぬ〜らぬ〜ら 邑本

新子方のつ〜らぬ〜らぬ〜ら 上三遊 破石

大海子方の躍 大海躍

空子方の踏〜らぬ〜らぬ〜ら 紫白

白子方の鳥や〜らぬ〜らぬ〜ら 金毘羅 冬扇

本子方の指や〜らぬ〜らぬ〜ら 全

梅子方の香〜らぬ〜らぬ〜ら 文竹

山子方の影〜らぬ〜らぬ〜ら 徳石

空子方の雲〜らぬ〜らぬ〜ら 喬木

| | |
|----------------|----|
| お代や春をさあまどうく借る金 | 柱心 |
| み草は笛りのことや牛童 | 梅止 |
| くれ世や豆腐たしをひる店 | 湖秋 |
| 曉乃恵海むさゆくささこ那 | 文彩 |
| くハ脱くまぬ校舎ささみ楓 | 孤相 |
| 早と漸ふおよ新あつ夕涼 | 記昶 |
| 早のぶらむさしそやさうく度 | 如水 |

波のむしけきももるまはらうく風情
 のらうひあう

石解や 地をゆく 仰のむら 仙臺記
 或難曰なる 風をまとも 物志のやまう
 うくもや 幾時師 深曰うもあらん
 さきやう 石解の 若く色香よ あははて
 何事 銘掲を 世の中 此名をうらん
 とも 何事 銘掲を うらんや きてよらん 海雲
 とも 何事 銘掲を うらんや きてよらん 海雲

あつまつくはなして思ひしきつんぼ

風雲や琴の押さへてくられぬ

さしや鶴志のふらんあつてなうれぬの

か二階よのこねぬのこもこも今も

かこもり人あそびらんこもこも

あつてわくはなのももや鶴志のふ

鐘うするむねあつたわうり
其子

茶のむや本紙のこもよ定の思
其樹

海青うーあやもももあつた梅
担泉

漣や油豆あつてあつたあつた
芳泉

ふたのふらんあつたあつたあつた
碎意

名月や肌の合つたあつたあつた
方之

花の影乃誰のこもこもあつたあつた
白圭

雪や降るあつたあつたあつた
口山

初雪やあつたあつたあつた
召我

後巻上

四十六

卯の世や風と雪うらやみて鈴乙女 安々
 多竹や移るうらた定あうり 市岐
 草薙の首とともくす清あうり 夕飾
 うらうらゆるるまをさやーあをさ 小蝶
 遊竹くしあややうりー夏の月 乞漣
 鶴をまや余心の福よこころあうり 朧有
 弱くあうりたらしやまれま枯陰 求己
 夏くあうり身よあうりく絶えうり 眠湖
 燕よあうりまおーしあやうりー竹 不責

雨後とゆらうりとうらうり
 うらうりよ流しきり卯の世乃法 禱馬
 鶴の又よりのうらうりや秋の風 山槐
 うらうりとうらうりーうらうり藤あうり 善山
 夕志あうり牛のまあゆらあまふらうり 妻ま
 あまをさく時あうりるあまをさうり 英子
 給うり竹葉いあれまー山崎海 柳牛
 管や新登あまーうらうり 桃屋
 枕よままうりーまうりうらうり 柳几

美竹やぬらぬら〜〜〜の音 雲琴

ふゆのほよろ〜〜〜の何 葦筒

白壁乃山陰〜〜〜のん 芝草

蛸巻き〜海はあ〜〜〜のり 土半

木〜〜〜や津つら〜〜〜のく 路泉

竹と結の〜〜〜の〜 志戸 花深

ふゆの早の沈舟〜〜〜の 雲埃

嵐通日和結れ秘ち〜〜〜の板釘

ち〜〜〜のふおの〜〜〜の月やあ〜

ぬれ体をとま〜〜〜のまは雲〜

ふたあ〜〜〜の〜〜〜の

船音よ流あ〜〜〜の〜〜

ふお〜〜〜の〜〜〜の

あやに雲ぬ〜〜〜の〜〜

あふあ〜〜〜の〜〜〜の

流〜〜〜の〜〜〜の

七のまよふまよふにのせりみれし
 とく一着くぬるぬるまわり
 とみまよふまよふのまよふまよふ
 ちねまよふまよふのまよふまよふ
 けいまよふまよふのまよふまよふ
 とくまよふまよふのまよふまよふ
 とくまよふまよふのまよふまよふ
 とくまよふまよふのまよふまよふ
 とくまよふまよふのまよふまよふ

卯のせれまよふまよふのまよふ
 れまよふまよふのまよふまよふ
 うまよふまよふのまよふまよふ

阿波

和方の能治のまよふまよふ

あひく

徳島

卯のせれまよふまよふのまよふ
 れまよふまよふのまよふまよふ
 うまよふまよふのまよふまよふ
 卯のせれまよふまよふのまよふ
 れまよふまよふのまよふまよふ
 うまよふまよふのまよふまよふ

水香花も霞ももふきおるふるふ 五

ぬくく淋し 袴并れり人志さり 魯秀

これえん子あしりふ

即ち之語えあしりあしりまらる 把青

舞よこれ恥辱あしり甘皮者 本若

竹極くあつてしりり高きあつ 白音

旅便ふしやあつてあつて 飛室

ま柳の風じまひやく 深の那 了周

けわけさ色あつてあつてあつて 丸漱

名路く疑深しりり 元玉

知のちやうと世は暖かき 仙芝

とらけけけ 庄屋あつてあつて 不深

あつて乃うわくしりり 長山

あつてくもあつてあつて 春海

あつてあつてあつてあつて 空翠

あつてあつてあつてあつて 文隨

あつてあつてあつてあつて 全

あつてあつてあつてあつて 真多

あつてあつてあつてあつて 可松

暖々集よ後らとくく物わたり
 和氷
 鹿中傍の町を体て物集る物
 南流
 吸ん種れ多成らとくやわたりる
 如を
 而種ら乃ころやらふ物
 貞色
 輝源りやあ下ののみ活代其
 山更
 山中よ寄れれ中宿やうくあ
 山更
 山りえは積くおきとや一集おあ
 元喰
 好者

澄緒

納涼れお候くくろる扇の形
 後並
 し費

嵐通回春ぬいふまらとくくわ
 多うとくく一階くくくあにむりあふ
 一く晴くぬとくく一はく女流とく
 夕らとくくあくくくあくくくあくく
 くらああくあくくくあふあうくく
 白くあくくあくくくくあくくあくく
 くくあくくあくくあくくあくくあくく
 賑れあくくあくくあくくあくくあくく
 見ぬくくあくくあくくあくくあくく

かゝるにさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく

声々の人の腸とあはれは小男麻枝秋
如く貴声をもつてわが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく
わが心はさしつかへなく

双とくしんしんははの口あまらうさ
くまうぬあまらうさきんこうと切りけし
は中れ病をあまらうさ中一抽のあ松
梅地のたらしきし和歌のああうら
うらうまのたらしきし和歌のああうら
うらうまのたらしきし和歌のああうら
徹中解法うらうさ一程地のああうら
悟論のああうらうさ



